

輸入検疫の話題

害虫のヒッチハイク

輸入植物の検査で、害虫が本来の寄主植物ではない植物に付着・潜入してわが国へやってくるいわゆる“ヒッチハイカー”がしばしば見受けられる。次に重要害虫についていくつかの例を紹介してみよう。

野菜類の害虫ジュウイチホシウリハムシ、イネ科作物の害虫アメリカコバネナガカメムシが北米産原木で数回発見され御用となっている。農場での飽食の後、外国行きとは知らずに越冬場所と決め込んだのであろう。

果樹の害虫フラーバラゾウムシ、マメ科の害虫アルファルファタコゾウムシが米国産ザクロのがく筒の中で時々発見されている。がく筒には乾燥したオシベがふさふさとして残っており、彼らは格好

の越冬(夏)場所と思っているに違いない。

東南アジアはヒッチハイカー天国で全く油断できない。サツマイモの害虫アリモドキゾウムシが果実、切花などで、ヨツモンマメゾウムシがくちなしの果実(染料)で、常習的ヒッチハイカーのアフリカマイマイが原木などで発見されている。また、ミカンコミバエがハッカ生茎葉で見つかったことがあるが、保冷コンテナ積みであつたので凍えており、侵入を許すことはなかった。

ゾウムシ類にヒッチハイクするものが多い。上記のほか、大洋州からの切花、果実、米国産家畜飼料ヘイキューブからもしばしば発見されている。

害虫はもともと招かざる客だが、こうしたイントルーダーの入国は固くお断り申し上げている。

海外のニュース

マイコプラズマ様微生物によるカキの天狗巣病

カキ (*Diospyros kaki* L.) は、今や全世界に栽培が広がりつつあるが、とくにわが国において古くから好まれてきた果樹である。甘ガキと渋ガキに大別されるが、渋ガキの一品種“蜂屋”にわが国ではもちろんのこと世界的にみても未記録と思われる天狗巣病 (Witches' broom) がアメリカで発見されたとの報告^{*}があつたので紹介する。

萎黄・叢生症状を示すカキの幼木から葉柄を採取し、超薄切片を作製して電子顕微鏡で観察したところ、師部細胞にマイコプラズマ様微生物 (MLO) が寄生していることが確認され、本病の病原は MLO であることが判明した。MLO による果樹の病害はわが国ではクリの萎黄病のみが知られているが海外にはカンキツのスタボーン病、リンゴのプロリフェレーション病、ナシのデクライン病など非常に大きな被害を与えているものが知られている。

この報告によると、本病に罹病している枝の芽を健全な幼木の芽に盾芽接ぎすると4~6週間以

内に黄化・叢生症状が発現し容易に接ぎ木伝染することが分つたが、媒介虫については調査が行なわれていない。MLO が寄生した植物をテトラサイクリン系の抗生物質で処理すると治療効果があることが知られており、本病の場合も同様に、テトラサイクリン系の抗生物質を病している幼木に注入する試験を行ったところ正常に生育し始めさらに葉柄の師部細胞を電子顕微鏡で観察しても MLO が見られず治療効果が認められた。

カキはわが国の果樹生産の重要な位置を占める一品目であるため、本病の侵入を防ぐためにも詳しい発生生態の解明、検定法の確立が望まれる。

※ Plant Disease Vol. 68 No. 6 (1984)

(病菌課 小林慶範)

発行所 横浜植物防疫所
〒231 横浜市中区北仲通5-57 横浜農林水産合同庁舎 ☎045(211)2299
発行人 池上 雅 春
編集責任者 北 島 克 己
印刷所 内村印刷株式会社
〒231 横浜市中区末吉町1-12 ☎045(261)7961